

龍源寺間歩

これから入る坑道は、石見銀山で発見された 1,000 近い採掘坑道の中で、おそらく最も重要なものの一つだろう。龍源寺間歩は 1715 年に徳川幕府の直営坑道として開かれ、2 世紀にわたって代官所によって運営された。その間何度か延長され、最終的に全長は 600 メートル近くに達し、現在は最初の 177 メートルが見学できる。ここで採掘された銀は 1603 年から 1867 年まで日本を支配した幕府にとって重要な収入源だった。

当初の坑道はノミとハンマーで掘られ、鉱夫たちが通り抜けられる程度の幅しかなかった。銀鉱脈に沿って掘られた、メインの坑道から分岐する多くの坑道は、鉱夫たちが極めて狭い環境で働いていたことを物語っている。メインの坑道は 19 世紀後半にトロッコも通れるために近代的な掘削機を使用して拡張されたため、それほど狭くは感じられない。また、地下水を排水し、水が溜まっていくことを避けるために使われた、深さ 100 メートルにも及ぶ縦坑（豎坑）もある。

龍源寺間歩での採掘が終わったのはずいぶん前のことだが、ここにはまだたくさんの銀が眠っている。その証拠のひとつが、ヘビネゴザの存在である。シダ系で、アーチ状の葉を持つ明るい緑色の植物で、重金属を多く含む土壌で生育する。